

『キャンパスピ』と
プルターク『アレクサンダーの生涯』

成 沢 和 子*

(1)

『キャンパスピ』(*Campaspe*) はリリー (John Lyly) の最初の劇で1580年の作であるとされている。完成すると直ちにブラックフライヤー座 (Blackfriars) で上演された。これは宮廷祝典係 (Master of Revels) の目にとまって、その年の冬の祝祭シーズンに取り上げられるのを狙ってのことであつたらしいが、急ぎ過ぎたあまり準備不十分で、結局念願通り宮廷での上演がかなつたのは、翌シーズンの正月 (New Year's Day at night), つまり1982年の正月になった¹⁾。第1作目とはいえ、決して習作的な未熟さは無く²⁾、概して好評だったことは、同シーズンの2月27日 (Shrove Tuesday) に、2作目『サフォートファオ』(*Sapho and Phao*) が続いて取り上げられていることから窺える。『キャンパスピ』上演によって、リリーは劇作家として、宮廷への足掛りをつかんだのである。

成功の秘密は、この作品が当時のエリザベス女王を中心とした宮廷に、実に巧みにアピールしたことにある。主人公に歴史上の英雄アレクサンダー大王 (Alexander the great) を選び、美女キャンパスピ (Campaspe) と画家アペルス (Apelles) を配して、大王の恋と、克己心と寛容によってそれに打ち勝ち、真に偉大な王としての徳を示す物語。王者の名誉と愛の主題 (honor and love theme) というこの上もなく適切な素材と、魅力的な対話——例えば、

Alex. Is loue a vice?

Hep. It is no virtue.

(II, ii, 15-16)

のような、圧縮された意味と、快いリズムを持ったやりとり。これらは皆当時の宮廷の観客の最も好むものであつた。この小論では、リリーの成功の重大な鍵となつた、王位にあるヒーローの描写と、その点で少なからぬ影響を与えたと思われる、プルタークの『アレクサンダーの生涯』について、いささか考察してみたい。

アレクサンダー大王についての歴史上のエピソード、及び周囲の人物、ヘフェースジョン (Hephaestion), クリタス (Clitus), パーメニオ (Parmenio) などとの関係は、プルタークの『アレクサンダーの生涯』 (Plutarch: *The Life of Alexander*) が出典であることは、ボンド (R. W. Bond) によって詳細に指摘されている³⁾。ノース (Sir Thomas North) 訳の『英雄伝』 (*The Lives of Noble Grecians and Romans*) は、1579年にエ

* 信州大学医療技術短期大学部一般教育

リザベス女王に献上されている。ポンドはリリーが原典ではなく、ノース訳を参照したとして、その最も明白な証拠に、第1幕第3場82～96行にあるアレクサンダーと哲学者たちの問答を挙げている。彼によれば、この部分はプルタークの64章、大王とインドの哲学者たち、ギムノソフィスタイ (Gymnosophistae) の問答の場のノース訳と、用語上の酷似が認められるからである。

North:

The question he asked the first man, was this:

1. Whether the dead or the living, were the greater number.

He answered, the living. For the dead sayd he, are no more men.

2. The second man he asked: whether the earth, or the sea brought forth most creatures. He answered, the earth. For the sea sayd he, is but a part of the earth.

3. To the third man: which of all beastes was the subtillest. That (sayd he) which man hetherto never knew.

4. To the fourth: why did he make Sabbas rebell? Bicause sayd he, he should live honorably, or dye vilely.

5. To the fift, which he thought was first, the daye, or the night? He answered, the daye, by a day. The kinge finding his aunswer straunge, added to this speech: Straunge questions, must needes have straunge aunswers.

6. Comming to the sixt man, he asked him: how a man should come to be beloved: If he be a good men sayd he, not terrible.

7. To the seventh, how a man should be a god? In doing a thing, said he, impossible for a man.

8. To the eight, which was the stronger: life or death? Life, said he, that sufferth so many troubles.

9. And unto the ninth and last man: how long a man should live? Untill sayd he, he thinke it better to dye, then to live.

Lyly:

Alex. Plato, of all beastes, which is the subtillest?

Plato. That which man hetherto neuer knew.

Alex. Aristotle, how should a man be thought a God?

Aris. In doing a thing vnpossible for a man.

Alex. Crisippus, which was first, the day or the night?

Chrys. The day. by a day.

Alex. Indeede straunge questions must haue straunge answers.

Cleanthes, what say you, is life or death the stronger?

Cle. Life, that suffereth so many troubles.

Alex. *Crates*, how long should a man liue?

Crates. Till he thinke it better to die then liue.

Alex. *Anaxarchus*, whether doth the sea or the earth bring forth most creatures?

Anax. The earth, for the sea is but a parte of the earth.

(I, iii, 83-96)

プルタークからはもう1つ重要なエピソードが採られている。第1幕第1場に捕虜としてアレクサンダーの前に引き出されてくるテーベの婦人ティモクレア (Timoclea) に関するもので、以下はプルタークの12章である。

「この町を襲ったこれら様々の苛酷な悲惨事の中に、幾人かのトラケー人が名聲のある貞淑な女ティモクレイアの家に闖入して、部下のものは財物を掠奪したが、隊長は無理にこの女に迫ってこれを辱しめ、金か銀を何處かに持ってゐないかと訊いた。女は持っているると白状し、その男を1人だけ庭へ連れて行って井戸を指さし、町が陥落した時に自分はそこに最も貴重な物を投入れたと云った。そのトラケー人が俯いてその場所を調べてみると後ろに廻って突き落とし、石を澤山投込んで殺した。その女がトラケー人に縛られてアレクサンドロスのところへ連れて来られた時、先づ心も亂さず恐れもなく、それらの人の後ろに隨いて来るその顔附や歩き振りから身分のある氣位の高い人だといふことは明らかになったが、やがて大王がどういふ女なのかと尋ねると、ギリシャ人の自由のためにフィリップスに對して堂々と戦ひ、カイローネイアで將軍として戦死したテアーゲネースの姉妹だと答へた。そこでアレクサンドロスはこの女の返事と行動に感服して、子供たちと共に自由な身にして立去らせた。」

(河野与一訳以下同様)

(第12章)

このエピソードをもとにして、リリーは次の様な知的で、緊張感に充ちた対話を生み出している。捕えられた彼女が、アレクサンダーの臣下パーメニオに対する場面である。

Par. Madame, you neede not doubt, it is *Alexander*, that is the conquerour.

Timo. *Alex* hath ouercome, not conquered.

Par. To bring al vnder his subiection is to conquer.

Timo. He cannot subdue that which is diuine.

Par. Thebes was not.

Timo. Vertue is.

(I, i, 41-47)

劇中この場面だけに登場するティモクレアは、確かにエピソード的な役割しか与えられてはいないのだが、彼女と共にヒロイン、キャンパスビを登場させることによって劇的な役割を果し、さらにこのエピソードによって、劇中主要な概念であるアレクサンダーの寛容

を表現することで象徴的な役割をも果しているのである。

奇人哲学者のディオゲネス (Diogenes) についてもプルターク14章に言及されており、第2幕第2場のアレクサンダーの言葉、

Alex. Hephestion, were I not Alexander, I would wishe to be Diogenes.
(II, ii, 148)

はここからの直接の引用である⁴⁾。しかし、彼の言動についての他の部分はディオゲネスの自伝 (Diogenes Laertius: *Vitae Philosophorum*) による。これも重要な出典の1つである。

劇の主筋を形成するアレクサンダー、キャンパスピ、アペルスとの恋の物語は、プルタークには見出せない。こちらの方は、プリニー著『博物誌』 (Pliny: *Natural History*) 第35巻にある物語に基づいている。

「アレクサンダーは彼 (アペルス) に対して最も衆目を集めるような例で栄誉を与えた。彼にはキャンパスピという特に気に入りの妾がおり、その美しさを大変賞賛していた。それで彼女の裸像をアペルスに描かせるよう命じた。ところが、画家が使命を果しているうちに、女に恋してしまったことがわかったので、彼は彼女を画家に与えたのである。」
(第35巻, 36章)

プリニーのこのエピソードは、16世紀初め、イタリア人カスティリオーネ (Baldassare Castiglione) が著わした『宮廷人』 (*Il Cortegiano*) にも取り入れられている。この書はホビー (Sir Thomas Hoby) によって1561年に英訳が出版されており、当時の宮廷人、文人たちに非常な影響を与えた。リリーも当然これを読んでいたと考えられる。プリニー、カスティリオーネのどちらも、ほんの半ページ程度でアレクサンダーが愛人キャンパスピを画家アペルスに譲る顛末を記している。アレクサンダーの寛容 (magnanimity) と克己 (self-command) の偉大さを伝えようとする幾つかのエピソードの1つとしてである。

リリーはこの非常に興味ある状況を作品の主筋として用いた。劇中では、3人はそれぞれの立場に立った感情を与えられ、より人間的な肉付けがされている。アレクサンダーのキャンパスピに対する情熱は、2人の出逢いから描かれる。第1幕第1場、彼はティモクレアと共に捕虜として面前に引き出されたキャンパスピの美しさに目を奪われ、思わず話しかける。

Alex. ...but what are you fayre Lady, another sister to Theagines?
Camp. No sister to Theagines, but an humble hand-maid to Alexander, borne of a meane parentage but to extreme fortune.

(I, ii, 70-72)

彼女が卑しい身分の者と知っても、その美しさは王を魅了した。ついにアレクサンダーは

自分に相応しからぬ女に対する愛と悩みを、臣下であり信頼する友人へフェーションに告白する。

Alex. And sith thou haste beene always partaker of my triumphes, thou shalt be partaker of my tormentes. I loue, *Hephestion*, I loue! *Campaspe*, a thing farre vnfit for a Macedonian, for a king, for *Alexander*.

(II, ii, 18-21)

一方、アペルスとキャンパスピの愛の場面も又、デリケートな対話で、丁寧に描かれる。

Apel. I shall neuer drawe your eies well, because they blind mine.

Camp. Why then, paint me without eies, for I am blind.

(III, iii, 1-2)

Apel. Gentlewoman, the misfortune I had with your picture, wil put you to some paines to sitte againe to be painted.

Camp. It is smal paines for me to sit still, but infinit for you to draw still.

Apel. No Madame, to painte *Venus* was a pleasure, but to shadowe the sweete face of *Campaspe* it is a heauen!

(IV, ii, 18-23)

Apel. Whom do you loue best in the world?

Camp. He that made me last in the world.

Apel. That was a God.

Camp. I had thought it had beene a man. But whome do you honour most, *Apelles*?

Apel. The thing that is lykest you, *Campaspe*.

(IV, ii, 37-42)

アペルスはアレクサンダーの恋人を愛したことを悩み、

Apel. But alas! she is the paramour to a prince. Alexander the monarch of the earth hath both her body and affection. For what is it that kinges cannot obtaine by praiers, threates and promises? Wil not she think it better to sit vnder a cloth of estate like a queene, then in a poore shop like a huswife? and esteme it sweeter to be the concubine of the Lord of the world, then spouse to a painter in Athens?

(III, v, 28-34)

キャンパスピは王と画家との間で悩む。

Campaspe sola. *Campaspe*, it is hard to iudge whether thy choice be more vnwise, or the chauce vnfortunate. Doest thou preferre—but stay, vtter not that in

woordes, which maketh thine eares to glow with thoughts. Tush! better thy tongue wagge, then thy heart breake! Hath a painter crept further into thy mind then a Prince? *Apelles* then *Alexander*?

(IV, ii, 1-6)

しかし、いよいよ肖像が仕上がった時、2人はたとえ引き離されても愛を貫くことを固く決意する。

Apel. I haue now Campaspe, almost made an ende.

Camp. You tolde me, *Apelles*, you would neuer ende.

Apel. Neuer ende my loue: for it shal be eternal.

Camp. That is, neither to haue beginning nor ending.

Apel. You are disposed to mistake, I hope you do not mistrust.

Camp. What will you saye if *Alexander* perceive your loue?

Apel. I will say it is no treason to loue.

Camp. But how if he wil not suffer thee to see my person?

Apel. Then will I gase continually on thy picture.

Camp. That will not feede thy heart.

Apel. Yet shall it fill mine eye: besides the sweete thoughtes, the sure hopes, thy protested faith, wil cause me to imbrace thy shadow continually in mine armes, of the which by strong imagination I will make a substaunce.

Camp. Wel. I must be gon: but this assure your self, that I had rather bee in thy shop grinding colours, then in *Alexanders* court, following higher fortunes.

(IV, iv, 1-17)

3人3様の愛と苦悩は全くリリーのもので、プリニーにもカスティリオーネにも見出せない。『宮廷人』では「……大王は（アペルスを喜ばせるために）大変かわいがっていた女の不興も顧みず、彼女をアペルスに与えた。女は偉大な王から画家へ渡されたのをひどく悲しんでいるようだった。」⁵⁾と記している。2つの出典では、前述したように、このエピソードはアレクサンダーの偉大な“寛容”と“克己”を伝えることがその唯一の目的なのである。プリニーはこの点を以下のように明確に述べている。

「もともと偉大な心の持主である彼は、克己心の故に、そして又、他のあらゆる戦いにおける勝利に劣らず、この行為によってさらに一層偉大であった。なぜなら、彼は自己を克服し、画家に愛妾を与えたばかりでなく、愛情をも与えた。しかも、最近まで王のものだったのに、今や画工のものとなってしまった愛人の気持を思いやる心にもめげずにそうしたからである。」

(第35巻 36章)

そして、実は王の寛容と克己はリリーでも同じように作品のテーマなのである。彼はア

アレクサンダーのこうした徳を描くことによって、真に偉大な王であるヒーローを描出しようとしたのである。宮廷劇のテーマとしてこれ以上に相応しいものは無い。ただ、豊かな感性を持ったエリザベス宮廷の観客に対して、リリーはプリニーのように図式的に描くことは出来ない。王位にある者も、画家の愛もそれぞれの存在感を持って描かれなければならない。このためには、アレクサンダーのキャンパスピに対する愛が真摯で、それ故苦悩も深く、アペルスとキャンパスピの結びつきは運命的で、大王に対する畏怖は強くなければならない。この愛と苦悩を十分に描けば描くほど、自己を制して身分の卑しい者たちの愛を祝福し得たアレクサンダーの寛容の偉大さが浮彫りにされるのである。

Alex. I perceive *Alexander* cannot subdue the affections of men, though he conquer their countries. Loue falleth like dew aswel vpon the low grasse, as vpon the high Caeder. Sparkes haue their heate, Antes their gall, Flyes their spleene. Well, enjoy one another, I giue her thee franckly,

(V, iv, 127-132)

そして彼自身もこの決断を下し得た自己に対して満足を覚えることが出来たのである。

Alex. It were a shame *Alexander* should desire to commaund the world, if he could not commaund himselfe.

(V, iv, 150-151)

(2)

アレクサンダーの克己と寛容の偉大さについては、先に述べたプリニーの“*magnus animo, maior imperio sui nec minor hoc facto quam victoria alia*”⁶⁾にその出典を求めるのがごく普通である。⁷⁾しかし、アレクサンダーのこうしたイメージが、プリニーのほんのわずかな言及からのみ引き出されたと考えるのは十分ではないと思われる。こうした点から、先にこの作品の背景的な人間関係及び、ティモクレアのエピソードの出典として引用されたプルタークの『アレクサンダーの生涯』に再び光をあててみたいと思う。

この書を通読すると、数多くのエピソードはアレクサンダーの東方遠征に明け暮れる生涯を綴りながら、その特筆すべき長所として、彼の節制の強さと寛容さを際立たせていると思われる。アレクサンダーの自己を克服する厳しい節制については、ごく幼い時期のエピソードにも見出せる。

「まだ小さい時から、節制の徳が現はれ、他の事柄ではかっとして激しく進んで行くのに、肉體的な快感には容易に動かされず非常に控へ目にそれを味ったし、名譽心は年に似合はずその高い気位を重々しくしてゐた。」 (第4章)

王子としての名譽のために自己を律する彼は、成人して大軍を率いる王となってからも、

ますます強く同様の努力を続ける。

「口腹の欲に対する節制も強く、これはいろいろの場合に示したが、殊に母の稱號を與へてキャリアの女王に任命したアダーに言った言葉から明らかになる。と云ふのは、この女が好意を示して毎日多くの御馳走や菓子を贈り届け、仕舞には最も腕前がいいという評判の料理人やパン焼職人を寄越した時、そういふものは要らない。家庭教師のレオーニダースからもっと立派な料理番を貰っている。朝食には夜の歩行、夕食には軽い朝食がそれだと云った。」
(第22章)

「いざ仕事となると、酒も眠りも、遊戯も女も觀物も、他の諸將軍とは違つて、アレクサンドロスを引留めなかつた。」
(第23章)

ことに、女性に対する欲望に打ち勝とうとする意志については、くり返し語られる。アレクサンダーが征服した都市の女たちに対して、いかに紳士的に振舞つたかを語る文章は幾ヶ所もある。美しく丈の高いペルシャの女たちを見ても、彼は「これらの女の人に指も觸れず、結婚前にはバルシネー以外の女を知らなかつた。」⁸⁾ という。唯一の例外バルシネーについてもプルタークはこう述べている。

「この女はメムノーンの死後寡婦となつた時、ダマスコスで捕へられた。ギリシヤ風の教育を受け、物腰も淑やかであり、父のアルタバソスも王の娘の子であつたから、アレクサンドロスは、アリストブロースの説によると、パルメニオンの勧めに従つて、この美しい身分の高い女を容れることに決めたのである。」
(第21章)

彼ほどの王が、1人の女を手に入れるのにこれだけの理由付けを必要としたのである。プルタークがいかにアレクサンダーのこうした面での慎重さ、節制を強調しようとしていたか解る。

結婚についても同様のことが言える。第47章には、ロークサネーとの結婚の経緯が述べられている。

「又、宴會で眼の前に踊つてゐた年若く美しいロークサネーに關する話も、戀愛から始まつたものではあるが、その時の政治情勢に合ふものだと思はれた。と云ふのは、蠻族の人々は結婚による近親關係に元気をつけられ、しかもアレクサンドロスがかういふ事柄に關して誰も及ばないほど節制を守り、自分が愛情に負けたこの唯一人の女にさへ掟によらずには觸れずに通したために、人々はアレクサンドロスを非常に愛慕するやうになつた。」
(第47章)

貴族の娘であつたロークサネーとの結婚は、王の女性に対する誠実の証しであり、蠻族を

治める上での決め手であったという。つまりアレクサンダーは非常に多くの誘惑があったにもかかわらず、欲望からは行動せず、愛を貫らぬく場合にも王としての名誉と義務を十二分に考慮した上でそうしたのだった。この辺の記述は実に徹底していると言ってよい。

寛容についても同様に強調されている。前述したティモクレアの一件も彼の寛容を物語るエピソードであるが、ペルシャ王ダリウス3世一家に対するアレクサンダーの処遇は、その最も典型的なものであるばかりでなく、先の克己心についての好例でもある。ペルシャに進軍したアレクサンダーは、シリアの地でペルシャ軍との戦闘に勝利を収め、基地に戻ってくる。その彼の前にダリウスの母と妻と処女の娘2人が捕虜となっているという知らせがくる。彼は部下を遣って、

「ダーレイオスは死んではゐないしアレクサンドロスを恐れなくてもいい、ダーレイオスと戦争してゐるのは覇権のためであって、それらの女にはダーレイオスが王だった時に貰ってゐただけのものは何でも與へるやうにするからと告げさせた。この言葉も女たちには溫和で慇懃なものと思はれたが、実際には一層人情のある處置が取られた。それは、女たちが葬りたいと思つてゐた人々の埋葬を許し、戦利品の中にある著作物や飾を使はせ、それまで持つてゐた召使や受けてゐた尊敬を少しも減らさないばかりか、前よりも餘計給料を與へた。しかし捕虜になつてゐた身分のある貞節な女たちがアレクサンドロスから受けた最も立派な最も王にふさはしい恩恵は、恥づべき事を言はれたり気づかつたり覺悟したりする必要がなかつたために、敵の陣營にゐる気がしないで神聖な処女の部屋に守られてゐるのと同様、他の男たちには姿も見られない秘密な生活が續けられたことである。」

(第21章)

リリーの劇中でのアレクサンダーの次の言葉は、この記述の直接の反映であると考えられる。

Alex. Well Ladies, for so your vertues shew you, whatsoever your birthes be, you shallbe honourably entreated. Athens shall be your Thebes, & you shal not be as abiectes of warre, but as subiectes to *Alexander*. *Permenio*, conducte these honourable Ladies into the Citie: charge the souldiers not so much as in wordes to offer them any offence, and let all wants be supplied, so farre forre forth as shallbe necessary for such persons & my prisoners.

(I, i, 73-79)

このように非常な寛大な処置について述べた後、プルタークは次のように付け加えている。

「しかもダーレイオスの妻はすべての女王のうちで飛抜けて美しい人だと云はれ、ダーレイオス自身も至極美しい大きな男であったが、その娘たちは両親に似てゐると云

はれてゐた。」

(第21章)

この美しい捕虜の女たちを見て、アレクサンダーは「ペルシャの女は目の毒だ」⁹⁾ と言ったという。だが彼は「それらの女たちの美しい姿に自分の克己と節制の美しさを対抗させながら、生命のない肖像を見るやうにして通り過ぎた」¹⁰⁾ のである。なぜなら彼は「敵に勝つよりも自分に克つことの方が王にふさはしいと考へてゐた」¹¹⁾ からであった。ここで我々は『キャンパスピ』のクライマックスでの印象的なアレクサンダーの言葉 “It were a shame Alexander should desire to command the world, if he could not command himself” (V, iv, 150-151) を思い起さない訳にはいかない。キャンパスピに対する思いを克服して、彼女とアペルススの愛を祝福し得た自分に強い自信を持ち、王としての道を歩もうとする決意に溢れるこの言葉がプルタークを下敷にしていることは十分に考えられる。

ダリウス王の妻スタティラはやがて世を去るのだが、アレクサンダーは「多額の費用を吝まらずにこの人を葬った。」¹²⁾ この様子を戦地のダリウスに知らせたタイレーオスという宦官の1人はこう語っている。

「御存命中のスタティラも王様の母上も王女方も、王様のお顔の光、主なる神オーロマデースがやがてまた輝かして下さる筈の光を見ないといふこと以外は今までの御幸福を何一つ缺いてはおいでにならず、お亡くなりになってからも立派な営みをお受けになって、敵方の涙に敬はれておいでです。アレクサンドロスは戦に勇猛なやうに勝利の後には温和なのです。」

(第30章)

だが、これを聞いたダリウスはアレクサンダーの処遇がありうべからざる寛大と親切に満ちているので、返って不安に駆られ、妻がひどく屈辱的な立場に置かれていたのではないかと疑うのである。

「今私の嘆いてゐるスタティラの不幸はまだまだひどいものだったのか。あれが生きてゐる間から私が實はもっとみじめな目に会つてゐたわけなのか。いっそ残酷で陰惨な敵の手に落ちた方が、不運だとしてもまだ名譽を毀はさずに済んだことになるのか。若い男が敵の妻にそれほどまで敬意を盡すとは、どういふ間柄なのだ。」(第30章)

タイレーオスは驚き且つ恐れて「アレクサンドロスがペルシャの男たちに勇気を示した以上にペルシャの女たちに節制を示したことを感嘆するやうに勧めた。」¹³⁾ という。ダリウス3世一家に関するエピソードほどアレクサンダーの常人と異った。王位にある者のみに相応しい寛容と克己を伝えるものは無かる。プルターク中で最も印象深い個所である。

(3)

リリーがプルタークの『アレクサンダーの生涯』で最も強く心をとらえられたのは、そ

ここに描かれたアレクサンダーの並外れた寛大さと克己心である。それは彼が描きたかった王位にあるヒーローに最も相応しいものであった。リリーはこの超人的とも言える感情とその見事なコントロールを劇中に表現するために、実に説得力ある方法を用いた。この点をハンターが巧みに解明してみせてくれる。¹⁴⁾ リリーはプリニーからの愛のプロットを辿りつつ恋する人アレクサンダーを一方に示し、他方に、哲学者たちと問答し、アペルスと絵画について語る知的な興味にあふれたアレクサンダーを示す。

Alex. Lend me thy pensil *Apelles*, I will paint, & thou shalt iudge.

Apel. Here.

Alex. The coale breakes.

Apel. You leane too hard.

Alex. Now it blackes not.

Apel. You leane too soft.

Alex. This is awry.

Apel. Your eie goeth not with your mind,

Alex. Now it is worse.

Apel. Your hand goeth not with your mind.

Alex. Nay, if al be too hard or soft, so many rules and regards, that ones hand, ones eie, ones minde must all draw together, I had rather bee setting of a battell then blotting of a boord. But how haue I done heere?

Apel. Like a king.

Alex. I thinke so; but nothing more vnlike a Painter.

(III, iv, 97-113)

幾つかのこういった対話によって、リリーは王が決して愛にのみ心を奪われているわけではないことを示しており、そして同時に、哲学にも絵画にも十分興味を持っているが、又十分な距離を置いていることも語っている。この距離が“恋人アレクサンダー”にも当てはまることが暗示されるのである。

さらにリリーは、アレクサンダーの愛や苦悩の感情を出来るだけ本人の口からではなく、他の登場人物の口を通して表現する。こうすることによって、リリー自身が王位にあるものの気持を直接には知り得ないような印象を与え、不思議に間接的な効果を伴ってそれを表現出来る、とハンターは指摘する。第2幕第2場で、アレクサンダーは“I love! I love Campaspe”と烈しい調子で告白したが、常の人間らしい声はここまでで、その後、普通の恋人なら口にするであろう愛の理不尽さに対する苛立ちと嘆きの言葉は、諫言に形を変えて、ヘフェーションの口を通して出てくる。

Hep. O *Alexander*, that soft and yeelding minde should not bee in him, whose hard and vnconquered heart hath made so many yeele. But you loue, ah grieve! but whom? *Campaspe*, ah shame! a maide forsooth vnknowne, vnnoble, & who

can tell whether immodest ?

...

Though she haue heauenly giftes, vertue and bewtie, is she not of earthly mettall, flesh and bloud ? You Alexander that would be a God, shew your selfe in this worse then a man, so soone to be both ouerseene and ouertaken in a woman,...

(II, ii, 39-72)

これを受けて、アレキサンダーは王の愛は通常概念では理解出来ない超絶的なものであり、王のみが知り、支配しうるものであると語る。

Alex. My case were light *Hephestion*, and not worthy to be called loue, if reason were a remedy, or sentences could salue, that sense cannot conceiue.

...

An Eclipse in the Sunne is more then the falling of a starre; none can conceiue the torments of a king, vnlesse hee be a king, whose desires are not inferior to their dignities.

(II, ii, 77-85)

Alex. I am a conquerour, she a captiue; I as fortunate, as she faire: my greatnes may aunswer her wants and the giftes of my minde the modestie of hers: Is it not likely then that she should loue? Is it not reasonable?

(II, ii, 106-109)

こうして王位の超絶性をアレクサンダーに語らせ、恋人の嘆きをヘフェーションに語らせることで、リリーは巧みに王の人間の心中と王位の絶対的高みを共に描くことに成功した。この間の事情をハンターは次の様に述べている。

The difficulties that modern journalists and entertainers experience when depicting the amatory emotions of royal persons may sharpen our awareness of Lyly's skill. The difficulty is one of finding a formula which will cover both the dignity of the prince and the ordinariness of the emotion; if the former is overemphasized the emotion is frozen and unreal; if the latter is played up too much we lose sight of the prince. By his carefully calculated indirection Lyly achieves both aims: Alexander is both defeated by love and a conqueror over it; the figure of the great king, always in command, is never obliterated by the image of the lover, for till the danger is over he hardly admits to the existence of the danger.¹⁵⁾

以上の様なテクニックを用いてアレクサンダーを描いたリリーは、彼を、あれほど執着したキャンパスピをアペルスに譲るといふ並外れた克己と寛容な行為をなし得る人物として準備していった。プルタークに描かれたアレクサンダーの寛容と克己は、リリーによって真に偉大な王たるものに具わった特質として強調される。これはリリーがこの作品で宮

廷に認められるきっかけを作った重大なポイントであろう。

Notes

- 1) R. W. Bond: *The Complete Works of John Lyly*, Oxford, Clarendon Press, 1967, vol. 2, pp. 310-311.
- 2) G. K. Hunter は *John Lyly: The Humanist as Courtier* (London, Loutledge & Kegan Paul, 1962, p.160.) において, “It is obvious from the opening lines that this play, though his first, is, however, no piece of prentice work” と述べている。
- 3) Bond, *op. cit.*, pp. 301-309.
- 4) “Ἀλλὰ μὲν ἐγώ,” εἶπεν, “εἰ μὴ Ἀλέξανδρος ἦμεν, Διογένης ἂν ἦμεν.” (*Plutarch's Lives ; Alexander, XIV*, Loeb Classical Library p.258)
「私がいもしアレクサンドロスでなかったならば、ディオゲネースになりたい。」
- 5) Everyman's Library 版で p.81. ll.6-8.
- 6) Pliny ; *Natural History IX*, Book xxxv, (Loeb Classical Library, p. 324. ll.85-87.)
- 7) Hunter も pliny の “magnus animo...” を引用している。p. 161.
- 8) 『プルターク英雄伝 第9巻』“アレクサンドロス” 河野与一訳, (岩波文庫116-9) 第21章, p. 34.
- 9) *Ibid.* p.35.
- 10) *Ibid.*
- 11) *Ibid.*, p.34.
- 12) *Ibid.*, 第29章 p.46.
- 13) *Ibid.*, 第30章 pp.47-48.
- 14) Hunter, *op. cit.*, pp.160-166.
- 15) *Ibid.*, p.164.

Bibliography

- Castiglione, Baldassare ; *The Book of the Courtier*, tr. by Sir Thomas Hoby, London, Dent. & Sons Ltd., 1959. (Everyman's Library No. 807)
- Lyly, John; *The Complete Works of John Lyly*, ed., by R. W. Bond, Oxford, Clarendon Press, 1967, 3vols.
- Pliny, the elder ; *Natural History*, tr. by H. Rackham, London, William Heinemann Ltd., 1968. vol. IX (Loeb Classical Library No.394)
- Plutarch's Lives*, tr. by Bernadotte Perrin, London, William Heinemann Ltd., 1971, vol. VII (Loeb Classical Library No.99)
- Plutarch, *The Lives of Noble Grecians and Romans*, tr. by Sir Thomas North, 1575.
『プルターク英雄伝』河野与一訳, 東京, 岩波書店, 1980. (岩波文庫 116)

(1981年9月30日 受付)